

Philip Meadows Taylor の *A Noble Queen* について

小西真弓

序

近代のヨーロッパの文学や芸術作品に登場するイスラムの女性といえば、一般的に男尊女卑の下で満足な教育が受けられず自己主張も許されなかったためか、声なき日陰者か、あるいは単なる男性の欲望の対象として描かれているものが多い。確かに神秘のヴェールに包まれた彼女たちの内面を理解することは、ヨーロッパの芸術家や作家には困難であっただろうが、厳しい宗教的戒律に束縛されているはずの彼女たちが無知な娼婦や魂のない動物のような存在としてステレオタイプ化されがちであったのは、正にサイド(Said)が『オリエンタリズム』で批判する西洋の思考様式、即ちオリエントの女性は啓蒙化されたヨーロッパの女性とは正反対の属性をもった存在に違いないという見解の表れではないだろうか。実際に近代において『アラビアン・ナイト』にしばしば登場するような聡明な良妻賢母型の女性を描き出したヨーロッパの芸術家や文豪は極めて少数であった。このような傾向は、18世紀から20世紀にかけてアジ

ア・アフリカのイギリスやフランスの植民地を舞台にした文学作品にも著しく、物語に登場する多くのイスラムの女性は海外からの支配者と同胞の男たちの双方から抑圧されて家の奥深くに閉じ込められるか、さもなければ主人公の運命を左右するほどの官能性を発揮する人物として描かれている。彼女たちの献身ぶりや報われぬ恋もとりわけその対象がヨーロッパ男性であるならば情念に身を滅ぼす女の愚かさを物語っているようにさえ感じられる。しかし実際に植民地統治に直接携わった人々にとっては、外敵から一族を守るために戦場で活躍したり、夫や息子の陰で内政外交の手腕を発揮するイスラムの女性たちは侮れない存在であったに違いない。恐るべき敵、あるいは同盟者にもなった彼女たちの英知と情熱は、ヨーロッパの支配者たちに畏敬の念を抱かせ、彼らが著した年代記や文学作品のテーマにもなっている。本稿では、そのような崇拜すべきイスラムの女性をヒロインとして描いている作品の一つ、フィリップ・メドウズ・テイラーの『気高い女王』(*A Noble Queen*, 1878年)を紹介してみたい。

* テキストには、Philip M. Taylor, *A Noble Queen: A Romance of Indian History* (1878; rpt. New Delhi: Asian Educational Service, 1986) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

I

テイラーが「気高い女王」として描いたチャンド・ビービー(Chand Bebe)は、16世紀末にムガールの攻撃からアフマッドナガルの要塞を死守したことで有名なビジャプールの皇太后である。彼女に関する歴史資料は極めて少ないが、¹⁾ 19世紀半ばに南インドに滞在した作者は、「ビジャプールやアフマッドナガルの民衆が、有名なイスラム教徒のインド史家フィリシュタ以上に、彼女に対する愛着や知識を語り継いできた」(112)ことに感銘したのであろうか。物語の中では時代背景が詳述され、戦乱の中で信念を貫いて生きようとしたチャンド・ビービーと彼女を愛する人々の姿が鮮明に描き出されている。

アフマッドナガル国王ホサイン・ニザーム・シャーの娘チャンド・ビービーが敵国ビジャプールの王室に、10歳になるかならないうちに嫁いだのは、彼女の意志とは無関係で、父王がアリ・アディル・シャー国王と婚姻同盟を結んで、ヒンドゥー王国のヴィジャヤナガルを打倒するためであった。ホサインの思惑通り、ヴィジャヤナガル軍はアフマッドナガルとビジャプールを主力としたイスラム軍団にターリコータ付近で敗れ、南インドのヒンドゥー勢力は壊滅状態に陥った。しかしその後も、イスラム諸国間の覇権争いは収まらず、ヴィビジャヤナガル王国から割愛させた領土をめぐるビジャプールとアフマッドナガルの争いは、

歴代にわたって築かれた両国の婚姻関係の無力さを示すばかりであった。そのために、いかにアディル・シャー国王から寵愛を受けたとはいえ、チャンド・ビービーには気の休まる時がなかったに違いない。なるほどビジャプールの民衆は国王亡き後に、幼い甥のイブラヒム・アディル・シャー世を擁して国政に献身した彼女を崇拜したが、名誉や権力に目のくらんだ重臣たちは相次いで反乱を起こしたり、女王が承認した大臣の地位を篡奪するのも躊躇しなかった。そのような内紛に乗じてアフマッドナガルやゴルコンダに攻め込まれたビジャプールが陥落しなかったのは、最後の砦に踏みとどまったチャンド・ビービーの悲願が天に通じたのであろうか。ベラールから派遣された援軍のおかげで危機を脱したビジャプールは、成人したイブラヒム国王が弟イスマエル皇子や大臣のディラワール・カーンの謀反を鎮圧した後に、最盛期へ向かったと言われている。

イスマエル皇子の反乱にまつわる事件から始まる『気高い女王』の前半で、舞台の中心を占めるのは、物語のもう一人のヒロインともいべき少女ゾラである。表題からは、実在した女王の伝記物語という印象を受けるこの作品において、彼女は、戦うチャンド・ビービーに慈愛に満ちた「母」のイメージを添えると同時に、自らもイスラム教的な理念を体現する女性として物語を

1) チャンド・ビービーに関する伝記的事項については、Mahomed Kasim Ferishta, *History of the Rise of the Mahomedan Power in India till the Year A.D. 1612*, trans. John Briggs (Calcutta: Editions Indian, 1910) を参考にした。

彩っている。

幼い頃に両親を失ったゾラはビジャプールの辺境のジャルドゥルグ砦で、祖父サイド・アフマッド・アリの庇護の下に貧しいながら平和な日々を送っていた。二人が人里離れた砦に陰棲しているのは、アフマッドが40年ほど前に、イブラヒムI世からいわれの無い罪で目を潰され当地に政治犯として送り込まれて以来、ダルウィーシュ(托鉢者)として世を捨て、世間からも忘れ去られてしまったためである。しかし優れた医术をもち、イスラム学にも造詣の深かった彼は、孫娘を助手にして近隣の人々に医療や説教を施して生計をたて、ゾラを宮廷の王女が身につける以上の教養をもつ娘に育てつつあった。そんな二人の運命は、チャンド・ビービーが養子として愛する青年アバス・カーンとの出会いをきっかけに大きく変わる。

ゾラのもとに担ぎ込まれてきたアバス・カーンはイスマエル皇子の謀反に加担したエリアス・カーンとの一騎討ちで、重傷を負い意識も定かではなかった。ベルガウムで始まった反乱を鎮圧するために、イブラヒム国王から辺境に派遣されていたアバスは不意討ちをかけてきたエリアスを見事に討ち取るが、手勢の多くを失い自らは歩くことも困難になったため、生き残った忠臣の一人ランガの助言に従って、ジャルドゥルグ砦に避難することを決意する。一行はバイダル族ランガの同胞の協力もあって追手を避け、砦に辿り着くが、アバスの容体は長旅の疲れと遠縁にあたるエリアスを手にかけたショックで生死の境をさ迷うほど悪化してしまう。そこでゾラは祖父アフマッドの指示に従って彼を介抱し何とか蘇らせるが、純情で人里離れた砦に長年暮ら

していたためか、下界から突然舞い込んできた貴公子の彼に恋心を抱くようになる。アバスにとっても、瀕死の自分を懸命に看護してくれる彼女が忘れられぬ人になるのは、ごく自然な感情からであった。それ故、アフマッドから身元を明かされた彼は、祖父亡き後に身寄りの無くなるゾラを保護することを約束する。しかし、アバスの誓約も祖父の過去も聞かされないゾラは、身分違いの恋に身を焦がされながら、公用でチャンド・ビービーのもとへ帰る彼をわびしい思いで見送る。そんな彼女が、不品行で卑猥な笑みを投げかける砦の長官オスマン・ベグを嫌うのは当然であった。功績のある国王の重臣の子息とはいえ、預言者の血をひくとされるゾラにオスマン・ベグはふさわしい相手ではなかった。オスマン・ベグにしても美しい彼女は興味の対象ではあったが、乞食のような生活を送り、「自分に会うと身を震わせて退く」(87)彼女の態度やアフマッドの「聖なる集団は、トルコ族の泥棒の子孫とは縁組をしない」(87)という侮辱の言葉を思い出すと容易に彼女に近づくわけにはいかなかった。ところが、イスマエル皇子との親交を懸念した国王や父親によって砦に追いやられた彼には、辺境での閑職が次第に耐えられなくなってくる。従兄弟で国王の側近のアバスの手柄話も羨ましい限りであった。うさ晴らしに、金銭目当てに仲人をするマーマ・ルティーファを雇って花嫁を探そうとするが、評判の悪さが災いして、彼にふさわしい縁談話は一向にまとまらない。やけになった彼は、ルティーファの差し金もあり、ついに星占いも家柄の差も無視して矛先をゾラに向け、家臣を脅迫して彼女を誘拐させる。さすがのオスマン・ベグもゾラを暴力で妻にする

わけにはいかず、何とか恐怖で半狂乱になった彼女を説得して結婚式を強行しようとする。しかし、証人や花嫁の承諾、婚資の贈呈も無い結婚式はアラの神に対する冒瀆的行為であり、肝心のモッラー(イスラムの導師)にコーランの読誦を拒否される。怒ったオスマン・ベグは刀を抜きかけるが、臨席した家臣らに止められ、式典は翌日に延期される。この騒ぎは、多額の謝礼に目のくらんだルティーファにさえ前代未聞であり、仲人としての自分の評判に傷がつくことを恐れた彼女は助手のシリーンと相談の上、オスマン・ベグの館に入りするキンマ売りのグーラブにゾラを説得するように頼み込む。ところがグーラブは、二人に協力するどころかゾラの災難に憤り、何とか彼女を救い出すために、夫や友人と川向こうの故郷に帰省中だったランガの助けを得て、ゾラを館から逃亡させることに成功する。

忌まわしい結婚を免れたゾラは、追手を避けるために祖父や使用人と共にひとまずオスマン・ベグの権力が及ばないランガの居城にかくまわれる。しかし異教徒のバイダル族が大多数の山村で、年頃になっても婚約もせず、ヴェールもつけずに外出する彼女は、とかく村人の噂的となった。中でもランガの妻は美しい彼女に嫉妬して、ゾラを破廉恥な踊り子にたとえる有り様であった。村人の批判はやがて、アフマッドの耳にも入るようになり、いたたまれなくなった彼は、孫娘を道案内にタリーカ(神秘主義教団)への入門を目指して修行の旅に出ることを思いつく。なるほど年老いた彼にはいささかためらいもあったが、ゾラの居所を突き止めたオスマン・ベグからのしつこい結婚の申込みから身をかかわすため

にも二人は村を出る。

オスマン・ベグの求婚に対するゾラの態度を分析してみると、彼女には純情な乙女としてのイメージの他に、宗教倫理と自らの意志や名誉を重んじる貞節なイスラムの女性像が投影されている。ゾラが断固としてオスマン・ベグを拒否するのは、無垢な乙女の本能的な嫌悪感のためであるが、イスラム教徒としても彼女は、コーランの教えに背く彼の求婚に応じるわけにはいかなかった。たとえ「5万ルピーと一頭の象では運びきれないほどの衣装」(245)という婚資を条件に出されても、一たん恥も外聞もなく暴力で結婚式を強行しようとした彼は背教者であり、甘言をちりばめたオスマン・ベグの再求婚の手紙も彼女の自尊心を傷つけるばかりであった。彼の厚かましさに激怒した彼女は、手紙の返事として「祖父の命ある限り、自分も托鉢者として修行の旅の供をする」と使者のルティーファとシリーンの前で宣言し、二人を追い払う。そればかりか、彼女は旅先で勧められた他の結婚話にも一切応ずることもなく、祖父のアフマッドがサガルでタリーカの儀式を無事に済ませてワリー(聖者)として認められるようになったのをきっかけに、自らも神に仕える信徒(devotee)として正式に脱俗の誓いをたてようとする。しかし、そんな彼女の内面には世俗的な感情、即ちアバスへの恋心が秘められ、それを彼女は祖父がビジャプールへ行くことを決意した時に悟る：

ビジャプールはそれまでずっと彼女に

とって、自分の願望の到達点に思えた。懐かしいあの誓でも、周囲の人々はいつも、祖父とゾラがその町の間であるかのように話していた… 望みがないことは明らかで、アバス・カーンの置かれている立場について何も知らなかったが、彼女の心は常に彼のもとにあった。グルバルガで彼のニュースを聞いてから、彼女には新しい希望が湧いてくるように思われた。彼はきっと地位のある国王の側近に違いない。もし祖父が国王のもとへ行ったら、あの貴公子は、彼女の顔を耳にして尋ねるだろう。彼女にはアバス・カーンが戦争騒ぎや他に何か気がかりなことがあって、自分のことを頭の中から追いやって忘れてしまったとは思えなかったし、彼が少年の時に婚約してしまったとは想像もできなかった。偶然にもそんなことがあるという考えを彼女は抱くこともなく、未だに自分は忘れられてはいないと信じていた。もしそうなら、彼女がこれからも相変らずの生活を送り信仰の証として緑の粗衣を身につけていれば、²⁾ 彼女にとってはそれが災難よけになるだろう…(311)

「信仰の証として緑の粗衣」を纏ったゾラがこのような思いを抱いて修行の旅をするのは、愛と性を罪深いものと見なすキリスト教徒の読者の目には冒瀆的行為と映るかもしれない。しかし、イスラム教に内在する矛盾 男女の関係を否定的にとらえない一方で、(とりわけ女性の) 性的な放縦を罪悪とする見解 を考慮すると彼女の内なる思いと言動の矛盾は理解し難いものではない。元来、イスラムの教えは、適齢期に達した男女が結婚するのを奨励しているので、彼女は自らの人生の到達点をアバスに結びつけること、それ自体を背教とは思えない。その一方で、彼女がしばしばアバ

スに対する情熱を「乙女らしくない、間違っている」(367)と考えるのも、女性を魔物扱いしその魔力を封じ込めようとするコーランの説教による。アフマッドでさえ、孫娘が純潔の名誉を失うことを死よりも恐れながら、オスマン・ベグの再度の求婚そのものには寛大で、その対応をゾラに任せてしまう。また彼がゾラを正式に神に仕える脱俗者にすることに同意できないのも、彼女をしかるべき相手に嫁がせるのが神の意志のようにも思われるからであった。しからば、可憐な乙女の彼女が将来を託すべき相手に操を立てるために、タリーカへの入門をめざす緑の粗衣を着るのも、神は咎められないだろう。

イスラム教徒の男女観の問題はさておき、ゾラがイスラム教の理念に忠実なのは、彼女が修行のために物乞いをするような試練をくぐり抜けたら、祖父が悪魔祓いの祈禱によって多額の謝礼を受けても、それを気前よく貧者に与えることから理解できる。聖者の孫娘として、旅先の有力者から歓待され豪華な衣装を与えられても、彼女は清貧に甘んじることが信仰の道であると粗衣を纏い続けて暮らす。そんな彼女は、イスラム女性としての名誉を守るためには、自らの強い意志を表明することを躊躇しない。それは、弾劾裁判の法廷で彼女を侮辱したオスマン・ベグに対する彼女の態度に描き出されている。

ビジャプールに到着後、チャンド・ビービーから国王が臨席するオスマン・ベグの裁判で証言するように求められたゾラは、ペルシア語の発音に自信がないこともあり

2) イスラム神秘主義と色彩については、井筒俊彦著、『イスラーム哲学の原像』(岩波書店, 1980)82-92参照。

気後れするが、自分が純潔であることを公にする必要もあり、法廷に赴く。そこで意外にも、オスマン・ベグがイスマエル皇子の反乱に加担しようとしたことが発覚するが、彼は破廉恥にもゾラの件については、彼女が法的には自分の妻であることを主張する。彼の言い分によれば、彼女は婚前に自らの意志で彼のもとに来て、自分の妻となったのであり、結婚式は彼女の名誉のために挙行したとのことである。そのまことしやかな偽証にゾラは、彼に対して寛大になろうとする気持ちをすっかり失う。彼女には 旅先で彼の手下に誘拐されそうになったことも含めて 花嫁を求めするためにオスマン・ベグが常軌を逸した行動をとったことは不問にできて、彼女の貞節を汚すような暴言は絶対に許せなかった。そのために、彼女は証人を求めて真実を公にし、彼の罪をあばくことに必死になる：

ゾラはオスマン・ベグが彼女にとってあまりにも衝撃的で屈辱でもある要求をした時に、恥辱と義憤で震えた。彼女の胸はすすり泣きで盛り上がり、目は熱くなった。思わず涙が上気した頬からこぼれた。彼女は息が詰まって死ぬかもしれないと感じた。しかしその少女の勇氣はそんな悲惨な極限状態にあっても怯まなかった。彼女は厳かな祖父の嘆願と国王の優しい言葉によって気を取り直し、奮い立った...

「主なる神と私の言葉を聞いて下さる皆様の前で」と、彼女はゆっくり言った。「私は彼の妻ではありません。そのことを明らかにしてくれる証人もいます。あちらに生まれた時から私を知っているジャルドゥルグのモッラーが座っているのが見えます。もし許されるなら彼に証言させて下さい...

「彼は嘘をついている」と、オスマン・ベグは激怒して叫んだ。「彼は嘘をついてい

る。そこに恥知らずに立っている彼女は、事前に自分のところへやって来た。それに俺のしたことは彼女の恥を 俺が尊敬する聖なるサイイドの恥を 濯いでやったんだ。」

この無慈悲な演説は、聴衆をひどく動揺させた。モッラーの証言は全ての人々の心に確信を与えた。しかし、この忌まわしい告発は真実なのだろうか。中には少女を信用できなくなったような者さえいた。しかしゾラの肉体はこの上もなく緊張を強いられ、その精神の力は彼女の立場が危うくなるにつれて高揚し、彼女は叫んだ

「彼は私が恥知らずで、自分の意志で彼のもとへも行ったと言います。あそこに立っている奴隷のジューマに何が起こったのか証言させて下さい。」...(344-45)

ゾラの証言が真実であることは、ジューマの証言やオスマン・ベグが彼女に宛てた求婚の手紙が証拠となって立証される。その後彼女はチャンド・ビービーの「娘」として保護され、祖父の世話をすかたわら宮廷で公事に携わる生活を送ることになる。祖父のアフマッドも過去の冤罪の償いとして財産や邸宅を与えられ、聖者として国王の庇護の下に余生を送る身分を得る。なるほどそれでゾラは社会的にも、アバスにふさわしい相手となり、彼との身分の差を気にかける必要がなくなる。アバスの気持ちも、法廷で彼がゾラの戦闘士(champion)としてオスマン・ベグと対決すると名乗り出てくれたことで確認できた。彼の叔父の話によれば、アフマッドとアバスの祖父とはかつて親友であったという。しかしそのような誰の目から見ても縁のありそうな二人の結婚を妨げるのは、幼い頃にアバスの両親が取り決めた彼とアビシニア系の重臣の娘との婚約であり、そのためにゾラは「自

分の願望」を口にするのも憚られた。

アバスとゾラの関係について、『エディンバラ評伝』は、「二人の恋愛関係には西洋的な魅力があり、それが幾分なりともこの小説の東洋的な色彩をそこなっている³⁾」という批評を加えている。このような見解は東洋が情念の世界であるはずだという「オリエンタリズム」的思考が、いかに19世紀後半のイギリスの読者に浸透していたかを裏付けているが、プラトニックな男女関係は西洋人だけの属性であるというような考え方は根拠を欠いているのではないだろうか。肉体的な欲求を根源的なものとしながらも、イスラム教が婚前の男女関係を戒めているとしたなら、アバスとゾラがお互いの精神性を尊重するのも不自然には感じられない。確かに『エディンバラ評伝』が批判するように、アバスはサラディンを連想させるほど理想化されたイスラムの騎士であることは否定できない。しかし「人格には嫌悪感を覚えるものの、オスマン・ベグが小説の中で最も迫力があり、自然な印象を与える⁴⁾」という見解、即ち情念の虜がイスラムの男性の典型であるとする解釈には、読者の側の認識の歪みを感じられる。なるほど19世紀後半のイギリス人には、インドにおける同胞の放とうぶりが伝わらなかったのか、あるいは問題にされなかったのであろうか。⁵⁾ インドの父親なき欧亜混血児の数は、人種の差異よりもむしろ個々の社会環境や宗教思想に注目して、官能性という問題を論じるべきであると示唆している。

『気高い女王』に登場するチャンド・ビービーの描写には、敬けんなイスラム女性としてのイメージが反映されているが、彼女を啓蒙化されたイギリスの女性と対極的にとらえようとする「オリエンタリズム」的な偏見は感じられない。そもそも彼女は、エリザベス一世にもたとえられる理想的な女君主として次のように紹介されている：

チャンド・ビービーはビジャプールやアフマッドナガルの土語であるカンナダ語やマラータ語と同様、ペルシア語やアラビア語にも熟達し、トルコ語やツルキ語の他に軍隊で使われていた方言を流暢に話すことができた。そのほかにも多くの才芸を身につけていた。彼女は花を繊細に描き、七弦琴を上手に弾き、素晴らしい声でペルシアの詩や母国語のヒンドゥー語の物語詩を歌った...

ビジャプールに残っていることを願うが、宮廷のペルシア人画家が未亡人になる前の彼女を描いた肖像画が一枚ある... その姿は均整がとれていて大そう美しい。黒くて長いまつ毛のついた目は薄い茶色で大きく、眉毛は弧を描いている。口はたいそう優しそうで愛くるしく、かすかな微笑みを浮かべている... エリザベス女王治世下のイギリス人の中で、当時インドのデカン地方に女王に劣らぬ実力や政治手腕を発揮し、内容は異なるが彼女に引けをとらぬ教養や技能をもった一人の女性がいたこと、またその女性が、イギリスと同じくらい豊かで広い領土と、数も知

3) "A Noble Queen," *Edinburgh Review* 142 (1878) 249.

4) *Ibid.*, 254.

5) この点に関しては、Ronald Hyam, *Empire and Sexuality: The British Experience* (Manchester: Manchester University Press, 1990) 参照。

性もイギリス人と同程度の民を支配していたことを知る者は殆どいなかった。彼女は嫉妬深い敵に囲まれながら、忍耐と勇気で祖国を分割や崩壊から守った。そして絶対的な権力をもち、あらゆる誘惑にもさらされながら、気さくで素朴であり、寛大で慈悲深く、信仰にも厚くて善意に満ち、貞淑で徳の高い人物だった。インドの全女性の中で、チャンド・ビービーは無傷で値段のつけられない宝石のように際立つ存在であった。(127-28, 133)

チャンド・ビービーが実際にテイラーが描くほどに語学や芸能にすぐれた美貌の才媛であったかは定かではないが、壮大な宮殿やモスクが建てられたビジャプールの王妃として養育され、国政を託された彼女は恐らく、ムガールの王妃ヌール・ジャハーンにもひけをとらぬ才覚の持ち主であったに違いない。それは、子宝に恵まれなかったにも拘らず、アディル・シャー国王が彼女を唯一の妻として愛し、他に后や妾をもたなかったことから窺い知れる。しかし、当時のインド女性としては、稀にみるチャンド・ビービーの才気が、彼女自身の幸福ではなく、覇権争いに明け暮れる男性支配者の思惑に利したというのは、何とも皮肉な話ではないだろうか。「少女のような体つき」であった彼女が華やかな宮廷で芸術をたしなむばかりではなく、馬術や狩を得意とし戦術にたけていたのも、「嫉妬深い敵に囲まれながら」生きる権力者の妻の習いであったと思われる。それは、彼女が、「夫が狩や進軍する折も身を潜めず、彼の忠実な供として馬に乗り、攻防戦の時も国王の側を離れることはなかった」(127)ことから理解できる。

ビジャプールの民衆が、幼王を守るために戦火をくぐり抜けたチャンド・ビービー

を慕ったことは言うまでもないが、それは『気高い女王』の中では、舞台の設定年代を遡った数々の歴史的事件の概要によっても明らかにされている。例えば、アフマッドナガルに通じた売国奴という嫌疑でチャンド・ビービーをサッタラの砦に閉じこめた大臣のキシウワ・カーンは、「王室の馬に乗って街頭行進すると、女たちから野次られ、ゴミや灰を投げつけられたり、女王を虐げた輩として毒づかれた」(130)と言われる。「国王の福祉行政の長官であり、貧しい人々には慈善と思いやりを限りなく施した」(128)彼女は、イブラヒム国王ばかりではなく、民衆にとっても保護者であり、彼女を迫害した国賊キシウワ・カーンの死を悼む民衆は誰もいなかった。また「粗暴で御し難い」アビシニア系家臣の一人エクラス・カーンが彼女を幽閉の身から救い出してイブラヒム国王の摂政の座に復帰させたというエピソードも、臣民のチャンド・ビービーの人柄や政治手腕に対する信頼を浮き彫りにしている。それほど人望を集めたと伝えられるチャンド・ビービーの性格付けに関して、テイラーがまず彼女に投影したのは、アバスやゾラの「母」としての顔で、二人に接する彼女の姿は、峻厳な態度で謀反人を断罪したり、刀を抜いてアフマッドナガルの砦を死守したチャンド・ビービーとは、イメージを異にしている。

V

アバスから、アフマッドとゾラの災難を伝え聞いたチャンド・ビービーは、同情心をかき立てられて二人がビジャプールの都で、幸せな人生を送るように取り計らう。彼女の舅にあたるイブラヒム一世の乱心に

よって、盲目にされたアフマッドに謝意を表し、その孫娘の将来を保証するのは、国政に携わる者として、また弱者の保護をモットーとするイスラム教徒としての義務でもあった。彼女は、初対面から貧しい修行者の身なりままのゾラを抱きしめ、国賓として待遇することを約束する。そしてゾラが正式に脱俗していないことを知って喜び、年頃の彼女をどこかに縁づかせて幸せにすることこそ、自分に課せられた使命であるように感じさえる。ゾラのほうでも直接会ってみれば、厳めしい素振りもなく、「気さくで素朴」な印象を与えるチャンド・ビービーには気が置けなかった。オスマン・ベグの裁判後、ゾラはその能力を買われ、助手として女王の政務を手伝うようになる。そうこうするうちに、チャンド・ビービーは、懸命に公務に励む彼女の心にアバスへの思いが秘められていることに気づく。なるほど彼女を「母」として保護することを誓った女王にとって、ゾラはアバスにとってこの上もなくふさわしい相手に感じられた。アバスが彼女を慈しむ気持もオスマン・ベグの裁判に臨席して、十分に察することができた。そこでアバスの両親が取り決めた彼の婚約が慰謝料を払うことで解消されるや否や、彼女は二人を何とか結びつけようと、まずゾラの気持ちを確認する。そのチャンド・ビービーの優しい心使いは、次の彼女とゾラの会話の場面に表れている：

「私はこれまであなたがもう結婚する年だと思っていましたよ。あなたには、誰か噂を聞いたり、見たりして好きになった青年がいますか。もしそうなら、あなたの母親であるこの私に言いなさいね。頭を

私の胸に置いて言いなさい。ゾラ、私を信用できるでしょう。」それから女王は両手を差し出した。

少女は媚びを売るにとしては、あまりに誠実だった。彼女はその申し出に抵抗できなかった。女王の腕の中に身を置いて、感激のあまりすすり泣き、彼女は、アバスを初めて見た夜からオスマン・ベグの裁判に至るまでのすべて経過と、いかにあの貴公子が彼女を見捨てないと思っているかを、告白した...

「もう十分ですよ、あなた」と、女王は彼女の丸くて柔らかな頬をさすりながら言葉を返した。「あなたにとっても、あなたを愛する人たちにももう十分ですよ。神の祝福があなたにあるように、愛しい娘よ。」(367)

ゾラから祖父にも打ち明けなかった思いを告白されたチャンド・ビービーは、陰ながら彼女とアバスとの縁談話を取りもち、二人は周囲の祝福をうけて夫婦となる。以来アバス夫妻は、彼女の息子、娘として忠勤に励み、アフマッドナガルの救援に向かう彼女に付き添う。

チャンド・ビービーのゾラに対する「気さくで素朴」な態度は、神の前における人間の平等性というイスラム本来の教えに基づくものであるうか。それは彼女の為政者としての臣民への対応ぶりにも具現されている。彼女がアビシニア系の家臣から信望を得るのも、彼らをその肌の色や血統ではなく、個人の能力や忠誠心で処遇する政策を貫いたからであった。しかし、そのような彼女の平等主義が、身びいきに傾きがちな人々ばかりではなく、時に彼女自身の私的な感情と摩擦を起こすのも事実であった。ビジャプールの安泰のために、彼女がアバスとアビシニア人エリアス・カーンの手下

との決闘を心ならずも許し、その場面から目をそむけてしまうというエピソードは、公平な政治家としての正義感と母心の葛藤を物語っている。

イブラヒム国王が成人して以来、摂政の座から身を退いたものの、チャンド・ビービーは、アフマッドナガルに遠征中の国王の代行として、イスマエル皇子の謀反に関わる問題を処理する。いくつかの事件に関して、彼女が最も胸を痛めるのは、アバスが忠臣であったエリアス・カーンを不当に殺害したという噂であった。無論、彼女はアバスの正義を信じるが手元にはエリアス・カーンの裏切りを証明するものがなく、ビジャプールの町ではアビシニア人とデカン人(Dekhanies, トルコ, アラブ, ペルシア, 中央アジア系の民族とその混血)の仲が険悪になり、治安が悪化する。そこで彼女はやむを得ず重臣たちの臨席する宮廷にジャルドゥルグ砦から帰還したアバスを招いて、事のいきさつを弁明させる。しかし、アバスはその帰り道でエリアス・カーンの手下ヤクートに襲われる。衝撃を受けた彼女は、ヤクートを法廷で裁こうとするが、彼を取り巻くアビシニア人たちの気持ちは収まらない。一方アバスは、自らの正義を神に証明してもらって事態を打開しようとヤクートとの決闘を申し出る。もしアバスが、ヤクートの凶刃に斃れても、その成りゆきを「血の復讐」として認めなければならなかったが、彼女は巷での流血騒ぎを収めるために、不本意ながら決闘を許可する。なるほど彼女は証人として果たし合いには立ち会おうが、最後まで目を開けて二人が刀を交える様子を見てはいられなかった。幸いにもアバスは首尾よく敵を倒し、ヤクートが隠し持っていたイスマエル皇子一

派の陰謀の全容を暴露する書類も公開されて、一同はアバスの正義を確認する。アビシニア人たちも彼に謝罪し、女王とアバスに改めて忠誠を誓う。

決闘による審判や仇討ちを認めるチャンド・ビービーは、確かにイスラミ的な感覚をもつ政治支配者であるが、私的な感情を抑制した彼女の裁量には、やはり異民族や異教徒との共栄共存を理念とする政治のあり方が反映されていると言えよう。彼女がランガの証言を信頼して、新たに任命した新長官をオスマン・ベグの捕縛に派遣するのも、ランガが劣等民族とされるバイダル族であることに拘らず、一個人としての彼の人格を重視したためである。法廷でも彼女は陪審員や証人をその宗教や民族性で差別することもなく、卑しい身分の奴隷や使用人、外国人の証言にも耳を傾ける。このような彼女の寛容性はオスマン・ベグの処分を検討する審問会で、彼女がポルトガル人宣教師フランシスに自由に意見を述べさせたり、彼に病気の若王妃の診察を許可したことに楯つく宗教長官を制する様子に窺うことができる：

「お恐れながら」と、宗教長官は、いつも座る場所から叫んだ。「キリスト教徒どもは、新約聖書の正確な訳書を持ってはいません。預言者も彼らを非難したではありませんか。コーランの章句には
「いいえ、長官殿」と、女王は口をはさんだ。「私たちは、宗教ではなく国家の問題を論じるために集まったのです。どうか静かにして下さい。恵まれぬ者が避難するこの法廷で、すべての人間は、信仰が何であれ、私と神の目の届く限り平等です。その問題は神に託しましょう。神の前では私たちは皆、平等な存在なのです...」
長官はもうそれ以上、自分を抑制でき

なかった

「何てことだ．とんでもない．恥を知れ．恥を．アラーの神と預言者に仕える神聖な誉れ高いこの儂がこんなことを目にするとは，全く何てことだ．不信心者がビジャプールの宮殿で名誉にあやかるとは，とんでもない．奴が神の下僕だって！奴は豚を食い，ワインを飲むんだぞ！悪魔の使だ．奴は神の預言者ムスタファ・ムハンマドが呪った忌まわしい教義を吹聴するんだぞ！奴は偶像を崇拜して，それから」…

しかし長官は気にも止めなかった．「魔術だ．魔術だ」と，叫んだ．「その女は，キシウワ・カーンが大臣だった時に，魔術で告発されたじゃないか．あの大臣に囚人として送られた時に彼から非難されたんだぞ！」

「これは女王陛下が耳にされるには，あまりの侮辱です．どうか中へお入り下さい．彼を黙らせるのは，私共にお任せ下さい」と，玉座の近くに座っていた盲目の尊きエクラス・カーンが言った．

「いいえ」と女王は言葉を返した．「私は人前から逃げ出したことはありません，カーン殿．だから長官が忠誠を誓って，謝罪するのを待ちます．」そう言って彼女は堂々と玉座に坐りなおした…(173-183)

チャンド・ビービーが宗教長官の不敬罪を不問にするのは，彼が聖職者であり，暴言を謝罪したからであるが，彼女が重臣から魔女呼ばわりされるような侮辱に対する寛大さには，貞節なイスラム女性としてその分をわきまえるという謙虚さが反映されている．確かに彼女は，自分の宗教的な理念に基づく主義主張は押し通すが，それに反駁する宗教長官を断罪するほど専横な政治支配者ではない．そもそも彼女がビジャプールの政治を司るようになったのも，彼女の意志ではなく，夫の遺言に従ったためである．恐らく彼女は，宗教的には再婚が

許されていたこともあって，公の立場からばかりではなく個人的にも「あらゆる誘惑にさらされながら」政務に携わっていたのではないだろうか．いずれにしても，20代半ばで寡婦となったチャンド・ビービーが「二夫に見えず」イブラヒム国王の養育や国事のみ専念したのは，それが夫の遺志であり，神の意向でもあると確信していたからであろう．彼女が纏い続けた白装束は，権力の座を狙う男性からの誘惑に溺れて国政を誤ることを懸念した彼女の宗教的かつ政治的な配慮を象徴しているように思われる．

「夫の遺志，神の意向」という観点からすれば，確かにチャンド・ビービーは，いわゆる「女袴政権」(Petticoat Government)を代表する野心家ではなく，勇敢ではあるが，貞節な国王の「母」である．しかし，年代記を読んでまず印象に残るのは，受動的な意味での彼女の貞節さではなく，摂政の座を守るためにはあえて政敵を抹殺するという君主としての彼女の峻厳な一面であろう．実際にチャンド・ビービーはエリザベス一世のように臣下が政治権力を篡奪しようとしたり，彼女の政策に差し出がましく介入することを決して許さなかった．フィリシュタによれば，キシウワ・カーンが，国王亡き後に権力を乱用ようになった大臣のカミル・カーンを暗殺したのは，彼女の差し金である．さらに彼女は，アフマッドナガルへ帰国後も，後に大臣に任命したムハンマド・カーンに，素性の知れぬ少年アーマッドを国王として擁する重臣アンサール・カーンを殺害させたとも言わ

れる。⁶⁾ 無論、暗殺者たちが危険な使命を果たしたのは、彼女から媚を売られたからではなく、新大臣の地位を約束されたためであるが、これらの事件は、チャンド・ビービーには理想的なイスラム君主としての理念ばかりではなく、巧妙な駆け引きを操る政治手腕があったことを物語っている。なるほど彼女が陥落寸前のビジャプール砦で実兄のムルターザ国王が送り込んだアフマッドナガル軍と戦ったのは、彼女自身の政治的野心のためではなく、あくまでも幼王を守る立場から説明されている。しかし、その後まもなく国政から引退してアフマッドナガルの皇太子に嫁ぐイブラヒム国王の妹に伴って里帰りするのは、成人した国王に政権を託すためというよりは、むしろ大臣の地位を篡奪したディラワール・カーンの台頭によって摂政の座を追われたからであるとも考えられる。彼女が帰国した1584年当時、イブラヒム国王はまだ15、6歳の若輩で、彼女の庇護が必要であったに違いない。

『気高い女王』の中で、アフマッドナガルに帰国したチャンド・ビービーは、内紛の絶えぬ祖国に嫌気がさして再びビジャプールへ戻ることになっている。この点に関しては、フィリシュタの記述は曖昧であり、異論もあって定かではない。⁷⁾ しかし、少なくともビジャプールを舞台にした物語が繰り広げられる1590年以降について、彼女は

アフマッドナガルに滞在していたというのが、多くのインド史家に共通した見解である。即ち、祖国にあって王位篡奪戦に巻き込まれていたはずのチャンド・ビービーが、ビジャプールの宮殿で1593年に始まったとされるイスマエル皇子の謀反に関わる事件を解決したり、イブラヒム国王や臣民の安泰のために貢献するというプロットの展開は、史実に即してはいない。しかしその虚構の物語の前半にこそ、作者テイラーのチャンド・ビービーに対する愛着や崇拜が反映されているように思われる。彼女のイメージが神格化されているとしたなら、それは作者が南インドの人々と同様に、男性支配者らの政治的野心に振り回されながら、祖国を守るために女盛りの命を散らした彼女に、同情と畏敬の念を抱いたからであろう。

イブラヒム国王がアフマッドナガルから凱旋後、チャンド・ビービーは、国政を彼の手に乗せる。気がかりであった若王妃の容体も快方に向かい、彼女は皇太子の誕生を密かに期待する。しかし、平和の訪れたビジャプールで隠退生活を送ろうとしていた彼女のもとには、アフマッドナガルから援軍を求める手紙が次々に届き、彼女の心

6) Ferishta, *op. cit.*, 179-78参照。

7) Ferishtaによれば、アフマッドナガルのジュマル・カーン(Jumal Khan)とビジャプールの大臣キシュワ・カーンとの争い(1589年)の和議の条件の一つは、チャンド・ビービーをビジャプール軍の陣営に送ることであったという。しかし彼は、実際に彼女がビジャプールに帰国したとは記載していない。またテイラーが著した『インド史案内』や『オックスフォードのインド史』の中では、1584年にチャンド・ビービーがアフマッドナガルへ帰国した後、二度とビジャプールを訪れなかったことが言及されている。Ferishta, *op. cit.*, 169; Philip Meadows Taylor, *A Student's Manual of the History of India* (1904; rpt. New Delhi: Asian Educational Service, 1986) 303; Vincent A. Smith, *The Oxford History of India*, 3rd ed. by Percival Spear (1920; Oxford: Clarendon Press, 1958) 299参照。

は乱れる。ビジャプールとの戦いで国王を失った当地では、王位継承問題をめぐる分裂抗争が渦巻き、その隙をムガールのアクバル皇帝に虎視眈々と狙われていた。愚かな重臣たちの中には、自分勝手に王位継承者を擁立してアクバルの皇子に介入を求める者もいて、アフマッドナガルの国土は、今にもムガール軍に侵略されそうであった。窮余の策として、彼らは旧国王の叔母で隣国の名君として名を挙げたチャンド・ビービーに助けを求める。確かに彼女は、日和見主義で権力欲に取りつかれる歴代の国王や大臣よりも頼りになる存在であった。またビジャプールの国王や重臣たちも、当時インドの独立国を次々と制覇しつつあったアクバルの南インド遠征を恐れ、「事態は、デカン地方全体にとって危機である」(404)ことを認識し始める。共通の強敵を目前にして、アフマッドナガル、ビジャプール双方の支配者たちは、もはやこれまでの二国間の兄弟喧嘩のような争いに拘ってはいらなかった。アフマッドナガルの治安の回復に貢献することは、ビジャプールの安泰にも連なった。そこで、チャンド・ビービーは、国王とも相談の上、祖国の要請に応じてアバス夫妻らを伴ってアフマッドナガルへ赴く。

内部抗争の渦巻くアフマッドナガルへ帰国するチャンド・ビービーは、「もし、これから先の人生で昔のように戦乱に身を投じることになっても、その運命に従うのが義務であり、神の意志である」(410)という境地に至る。そのために、彼女は1595年にムガール軍をアフマッドナガルの砦で初めて迎え撃つ際に、一人の女性としての限界を越えた神がかり的な力を発揮できたのであ

ろうか。彼女は目前に迫った敵からの降伏の呼びかけに耳を傾ける兵士たちを叱咤激励して彼らの戦闘意欲を駆り立てる：

「怪我もせず、もし耐え抜けばもう少しで勝利が手に入る我々が、刀を捨てて怖じ気づいた女のように侵略者の足元に身を投げ出して命乞いをしようというのか。武器を手にした我々が、愛しい者たちを守るためにそれを使うのをやめるのか。我が兵士たちよ、お前たちの女子供はムガールの野蛮な暴力に自分たちの身が委ねられるのを有り難いとは思わない。見よ、私はただの女だ。弱い女だ。だが命ある限りこの場を離れない。何が起ころうと私は最も正しき神が我々を救い、この暴虐から解放して下さるのを信じている。さあ行け。地雷工兵たちを連れて来い...」

すると、「私たちは決してあなたを見捨てません、母君。私たちは神の意志とあらば死ぬかもしれませんが、降伏はしません。御心配には及びません。私たちのすることを見ていて下さい」というかすれた叫び声が響き渡った。(429)

士気を取り戻した兵士たちに感激したチャンド・ビービーは、彼らの戦いぶりを見守るだけではなく、自らもヴェールを被りつつ、「軽い鎖かたびらと籠手を着け、夫がその昔したように戦いの喚声をあげながら、刀を振りかざして矢面にいる兵士たちの中に進み出た...」(432)そして、戦闘の間は味方の兵士に水を運んだり、声をかけて彼らを励まし、「夜は一晩中、彼女自身が城壁の裂け目の修理を監督し、明け方までには、その壁を7から8フィートの高さにまで修復させた」⁸⁾のである。そんなチャンド・ビービーの反撃ぶりに感銘した敵の総大将ムラッド皇子が彼女に与えた「スルタ

8) Ferishta, *op. cit.*, 183.

ンの皇太后「(sultana)」という尊称は、何よりも彼女の偉大な功績を象徴している。

アフマッドナガルの砦を長期間包囲したものの、砦からの猛烈な反撃や補給路を絶つビジャプール軍の兵糧攻めに苦戦したムラッド皇子は、ベラールを割譲すれば撤退するという和議をチャンド・ビービーに提案する。最初はその条件に抵抗を感じるものの、彼女にとってベラールは兄ムルターザが無理やりアフマッドナガルに併合した領地であり、昔からの国土を保持するためには手放しても未練はなかった。またビジャプールやゴルコンダからの援軍もあまり積極的にムガール軍と戦う気配はなく、たとえ三国が同盟してもその軍力はムガールの大軍団を撃退するほどではない。この機会を逃せば、祖国の将来は保証できなかった。そこで彼女は、ムラッド皇子の申し出を受け入れ、アフマッドナガルは崩壊や敗北の不名誉を免れる。

ムガール軍に包囲を解かれた後、恩知らずの重臣たちは再び王位継承問題をめぐってチャンド・ビービーに反抗したり、謀反を企ててアフマッドナガルを再び内部崩壊の危機にさらす。宮殿では大臣たるミー・マンजू(Meean Munjoo)が、正統な王位継承者バハードゥールを退けて、アーマッドを国王として認めるようにチャンド・ビービーに迫る有り様であった。思い余った彼女はイブラヒム国王に仲裁を求め、アーマッドを領地や爵位付きでミー・マンजूと共にビジャプールに引き取ってもらおう。以来、バハードゥールの玉座は確保されるが、新たに大臣に任命され

たムハンマド・カーンは、彼女をないがしろにして国政を牛耳るようになる。そればかりか、彼はビジャプールからチャンド・ビービーの援軍に来たスハイル・カーンを撃退しようと、愚かにもベラールに駐留するムガール軍の指揮官カーン・カーナーンと内通する。それは当然アクバル皇帝の知るところとなり、アフマッドナガルは再び彼の南方遠征の標的にされてしまう。ムハンマドの裏切りは間もなく断罪され、チャンド・ビービーは政権を取り戻す。しかし、彼の後任ネー・アング・カーンも彼女から摂政の座を篡奪しようと奸計を練ったり、独断でムガールとの戦いに挑んだあげく、勝ち目がないことを悟って砦から逃げ出してしまう。そのようなアフマッドナガルの内部事情を察知したムガール軍は和平条約に反してベラール付近の領土を侵犯し、ビジャプールへ帰還するスハイル・カーンの率いる軍団と争って、アフマッドナガルの参戦を誘発する。その戦いに南インド征服欲を刺激されたアクバル皇帝は自ら南方へ下り始め、1600年初頭にはアフマッドナガル王国に北接するカーンディシュの砦ブルハンプルを占領する。そして当地からダーニヤール皇子とカーン・カーナーンが率いる大軍団をアフマッドナガルの砦へ送り込む。彼らの軍事力やアクバルの接近を考えると、さすがのイブラヒム国王も、アフマッドナガルに援軍を送ることをためらう。ゴルコンダのムハンマド・クリー国王にとっても、自国をアクバルの野望から守るためには、アフマッドナガルを見捨てなければならなかった。

国外からの援軍が期待できず、内部にも頼りになる重臣がないままムガール軍に砦を再び包囲されて、チャンド・ビービーが

暗澹たる気分に陥ってしまうのは当然であった。同情したアバスは彼女にパハードゥールを連れてマラータ族の守るジュネールへ落ち延びるように勧める。彼にとっては、二人さえ無事ならば、皆に残った自分たちは神の意志に運命を委ねても、ムガール軍に降伏して命乞いをしてもよかった。しかし、中には最後まで皆を死守しようとする兵士たちがいることを思うと、「彼女にとって、自分が試練に立ち向かう間、勇敢に一身を捧げて味方をしてくれた者たちを見捨てることは恥ずべき行為に思われた(464)。ヴェールをつけて戦う「スルターナ」としての名誉を守るためには、「死が近いなら、皆にいる間に来て欲しかった。それが彼女にとっては幸いだった」(464)。とはいえ、彼女には幼い国王や女子供までも勝ち目のない戦いの犠牲にすることは、神の意志に反するようにも思える。彼らの「母」あるいは「祖母」としての立場からは、その尊い命を守ることも、彼女の義務ではないのか。そのような様々な思いに心の平静さを失った彼女の様子は次のように描かれている：

チャンド・ビービーの心には落ち着かせることのできない不安があった。ゾラは自分にはもう彼女を動かす力がないと感じた。ゾラも愛する幼王と女王自身の命を救うように懇願した。そして幼王の母君も、女王と一緒に息子はきっと安全だろうと思って、一人でいる限りは誰からも苦しめられないような自分のことは心配せずに、幼王を外敵の攻撃に持ち堪える難攻不落のジュネールの皆に連れて行くよう女王に必死に頼んだ。しかし、やはり女王の気持ちは落ち着かなかった。彼女はどの道を選ぶべきか決められないと感じた。双方の沢山の意見は最初、彼女

を一方に引っ張り、それから別の方向へ引き寄せた。それで彼女はもう考えることもできず、皆の守備隊のところへ行って、懐かしいビジャプールと祖国アフマッドナガルの軍歌を聞いた。そして彼女は今だに女王であり、しかも神の前では皆に対して責任があることを感じた。それ故マワールの人々に伴われて皆から逃げ出すことも、ムガールから和議を得る手はずも整えなかった。(469)

チャンド・ビービーが最終的にはダーニヤール皇子に和議を申し出る気持ちになるのは、勝ち目のない戦いに挑んで領土を失うばかりではなく一族までも絶滅させてしまうことを恐れたからであろう。また個人的には、パハードゥールの大伯母、あるいは「祖母」として平和な隠退生活を送りたい気持ちがあったのかもしれない。いずれにしても、彼女が最終的に望んだのは、敵前逃亡でも集団自決を意味する死闘でもなかった。

無意味な戦いを避けようとしたチャンド・ビービーの決断は、一国の君主として恥ずべきものではなかった。彼女の思いがけない死がアバス夫妻や他の多くの家臣に悼まれたことは、正に彼女が然るべき「道」を選んだことを物語っている。しかし、それは戦いで血を流して名声を得ることを生きがいにするような家臣たちの反感を買う。彼女から和議に関する相談をもちかけられたハミッド・カーンは、ムガールに対する彼女の妥協を売国行為として吹聴し、外から共謀者を募って、皆の部屋に一人でいた彼女を暗殺してしまう。肝心な支配者を失ったアフマッドナガルの皆は、その後まもなくムガールの手中に落ち、パハードゥールは母君と共にグワリオールに幽閉さ

れる。しかしその後、有名な大臣マリク・アンバルの努力によってアフマッドナガル王国が崩壊を免れ、一時的にも国威を盛り返したことは、非業の死を遂げたチャンド・ビービーへのせめてもの弔いになった。

おわりに

『気高い女王』の後半で語られるチャンド・ビービーのアフマッドナガルでの活躍とその最期は、ほぼフィリシュタの記述に基づいて描かれている。しかし、彼女の暗殺者ハミッド・カーンがムガルに寝返ったオスマン・ベグの共謀者であり、⁹⁾ 彼らを

成敗するのがアバスであるという脚色には、彼女をあくまでも殉教者として描きたかった作者の心情が窺い知れる。テイラーがそのように物語を締めくくったのは、やはり彼の胸に浮かんだ彼女の像が麗しく貞節なイスラムの女王であったためであろうか。実際に彼女がどのような人物であったかは知る由もないが、この小説を解釈するにあたって重要なのは、チャンド・ビービーの実像に迫ることではなく、「オリエンタリズム」を越えた作者のイスラムの女性に対するアプローチを検討することで、その意味で本書は再読されるべき作品であると思われる。

9) チャンド・ビービーはハミッド・カーンという宦官の率いる暴徒に暗殺されたと言われるが、彼がムガル軍に内通した人物であるというのは、作者の脚色である。Ferishta, *op. cit.* 188参照。